

平成二十二年 福祉作文・ポスター・標語コンクール

主催 社会福祉法人 大崎市社会福祉協議会
後援 大崎市・大崎市教育委員会
株大崎タイムス社・大崎ケーブルテレビ

入賞おめでとうござります

今年度新たに、大崎市内の小・中学生を対象として、身近な「福祉」をテーマに、高齢者、障がい者の方との交流やボランティア活動等、日頃感じた事や考えている事を作文やポスター、標語に表現することにより、福祉への関心、理解を深めていただくことを目的に、「福祉作文・ポスター・標語コンクール」を実施いたしました。

◆福祉作文の部

- 【小学生の部】
- ◆最優秀賞 「12才のぼくに出来ること」 古川第一小学校 六年 菅野 光
 - ◆優秀賞 「いとこのももちゃん」 古川第一小学校 三年 青沼 樹
- 「ボランティア活動を通して」 三本木小学校 六年 佐藤 萌花
- ◆優良賞 「おじいさんの左手」 古川第二小学校 五年 菅井 一貴
- 「笑顔プレゼント」 鹿島台小学校 四年 齋田 あかり

【中学生の部】

 - ◆最優秀賞 「目の不自由な人のために働く盲導犬に会って」 川渡小学校 四年 安部 里映
 - 「元気がなくなってね」 中山小学校 四年 早坂 望羽
 - ◆優良賞 「みんな同じ」 三本木中学校 一年 遠藤 未央
 - ◆優秀賞 「私にできる小さな福祉」 三本木中学校 一年 鈴木 恵理
 - 「私の大切な人たち」 鹿島台中学校 二年 渡邊 けあき
 - ◆優良賞 「希望」 鹿島台中学校 二年 瀬戸 美咲

◆福祉ポスターの部

- 【小学生の部】
- ◆最優秀賞 「はじめてみよう 小さな一歩から」 古川第二小学校 五年 佐々木 幹太
 - ◆優秀賞 「みんな なかよし」 古川第五小学校 一年 阿部 慶佑
 - 「やさしい手を!!」 川渡小学校 四年 遊 佳奈
 - ◆優良賞 「思いやりをつなぐ手と手」 三本木小学校 五年 細川 真湖
 - 「さしだそう みんなの勇気と手」 沼部小学校 六年 齋藤 今日香
 - ◆最優秀賞 「ぬくもりを大切に」 田尻小学校 三年 山村 亜子
 - ◆優良賞 「やさしい心の扉を開いて」 古川北中学校 三年 金田 江莉奈
 - ◆優秀賞 「見て見ぬフリしていませんか」 鳴子中学校 三年 中鉢 幸子

◆福祉標語の部

- 【小学生の部】
- ◆最優秀賞 「私の手 小さいけれどハイ、どうぞ」 古川第二小学校 五年 河原 千尋
 - ◆優秀賞 「白いつえ かしてあげるよ ぼくの手も」 古川第二小学校 六年 柏崎 幸大
 - 「どうしたの そのひとこと 思いやり」 古川第二小学校 六年 石川 実生
 - ◆優良賞 「伝えよう 君の優しさ その勇気」 鹿島台第二小学校 四年 鹿野 愛夢
 - 「おもいやり かけることばと えがおから」 松山小学校 二年 平野 瑞穂
 - 「こまっっている あなたに そっと やさしい手」 松山小学校 六年 森 永蒼生
 - ◆最優秀賞 「声かけて ひとりぼっちがゼロの町」 古川中学校 二年 鷹 翔 涼 香

- ◆優秀賞 「一言で 命を救う 思いやり」 鳴子中学校 一年 高橋 明日香
- 「さしだすて はずかしくないりっぱだよ」 古川東中学校 一年 早坂 冬希
- ◆優良賞 「つえよりも この手を使って おばあちゃん」 古川東中学校 三年 千葉 あや音
- 「貯金箱 そこに入れて募金箱」 鳴子中学校 一年 高橋 雄太郎
- 「高齢者 知恵と努力の大先輩」 田尻中学校 二年 佐藤 里帆



最優秀賞受賞者の皆さん

福祉作文の部 小学生の部

十二才のぼくに出来ること

古川第一小学校 六年 菅野 光

最優秀賞

四才のぼくの弟は、障害を持っていません。弟は、一才のたん生日に病院で、脳に傷あとがあつてそれが原因で左手が動かず、左足にも障害があることを知りました。その時ぼくは、三年生でした。弟のたん生日なのに、みんな悲しい顔をしていて覚えています。そのあと弟は、拓桃医りよりりよう育センターに二ヶ月間お母さんと入院をしました。家族と会えるのは週末だけになりました。お父さんは仕事がいそがしかったので、ぼくはお母さんの実家から学校に通いました。弟の病気を知ってから今まで、何度もりよう育センターに行ったことがあります。そこは車いすの人や、生まれてからずっと入院している重い病気の人が大勢います。ぼくはそこで、かん者さんのサポートをする人達に出会いました。病院の送りむかえをする人、しん察室や訓練室まで車いすを押ししたり、トイレのお世話や食事のお世話をする様子を見ていて、いつも家族で感心しています。家族でもないのに、ここまで親切に出来る人がいることに気付いた時は、とてもおどろきました。だれにでも出来る事ではないと思えます。障害を持つ人をサポートする様子を見て、今の自分出来ることを考えるようになりました。まず(あいさつ)を考えてみたのですが、きっかけになった出来事がありました。お母さんと出かけた時、お昼ごはんを食べた店でとても混んでいたのに、一つだけ



テーブルが空いていました。そのテーブルのとなりでは障害のある子供や車いすの人達が、十人位で食事をしていました。お母さんはすぐ「ここよろしいですか?」と言って、空いているテーブルにつきました。席につくとお母さんは、今まで出会った障害者とその家族の話をしはじめました。最後に「このテーブルはちょうど、健康な人とハンディを持つ人とのかべみたい」と話しました。何となくですが、意味がわかりました。弟の事を想うと残念な気持ちになりました。家族のようにお世話するボランティアのみなさんを知っていたので、その時初めて障害から目をそらす人がいることを知りました。この事がきっかけで、自分に出来る事を考え、もし障害を持つ人に会ったら、目をそらすずにあいさつすることを心がけようと思つたのです。お母さんの話した(かべ)を作らないようにしようと思つました。ぼくは今、十二才です。自分がしてあげられることは(あいさつ)と年に数回募金をすることですが、これからももっと自分出来ることを考えていきたいです。お年よりや、困っている人にも親切にして、ボランティア活動をしている人からたくさん学んで、そのための勉強もしたい。こうと思つています。

福祉作文の部 中学生の部

みんな同じ

三本木中学校 一年 遠藤 未央

最優秀賞

私には目の障害をもっているおじがいます。私のおじは、赤ちゃんの頃に目の炎症を起こしたそうです。眼科の先生には「心配ないよ」と言われて安心していました。けれど、次の日の朝、おじの目は開かないくらいはれ上がっていたそうです。慌てて眼科に行くと大病院を紹介されて診察してもらったら、病院の先生に「残念ですが、もう手遅れです」と言われ、視力を失ってしまったそうです。そして、失明してしまつたおじは五才から盲学校に入校し、寮生活を始めました。何年か経ち、大学生になつたおじは学校の先生を目指して勉強し、見事に学校の先生になることが出来ました。今も宮城県盲学校で働いているそうです。そして、おじは目の見えな幼なじみの人と結婚し二人の子供の親になり、自立して幸せに生活しています。おじ達とは年に数回会うことがあります。おじ達も、とても障害をもっているとは思えないくらい明るく生活しているように見えます。私達知らないところで苦労してきているのですが、それを感じさせないで生活しているおじはとても尊敬できる存在です。もし、私もなんらかの障害をもつていたらおじのように明るく生活できているかな?と考えさせられます。



私は五体満足に生まれたのに、ちよつとした事でくじけたり、親に迷惑をかけたかと思つていると思つています。おじの姿を見ていると自分の姿が恥ずかしくなつてしまいます。何事にも前向きに明るく、くじけず、諦めない、そしていつも笑顔で生活していきたいです。私はおじのような目の見えな人とどのような関わり方をすればよいのか正直わかりませんでした。そんな時、母からおじは前にこんな事を言っていたと聞かされました。「とにかく声を掛けてもらおうと助かるんだあ、特に困っている時なんか頼みやすくなるからみんなとどん話しかけてくれよ」という事を聞き、関わり方が分かりました。障害者だからといって特別な事ではなく、人と人が繋がる一歩なんだと思います。私達の積極的な気持ちで障害者の方達は心を開いてくれるんじゃないかと思つきました。私のおじは柔道でパラリンピックに出場し、のど自慢にも出場しました。このような積極的なおじを見習い、私も積極的になれるようにしたいと思います。そして、人に優しく、人の役に立てて、おじのようになりたいです。